
私の告白

レンタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の告白

【Nコード】

N6215T

【作者名】

レンタ

【あらすじ】

みなさんは今までに告白をした経験がありますか？ そのときどんなシチュエーションで、どんなふうに告白しましたか？ 例えば、学校での昼休み、どこか人気のないところに呼び出して直接好きな気持ちを伝える。例えば好きな人とメールをしていて、偶然いい雰囲気になって流れて好きなことを相手に告げる。情報伝達ツールが増えた現代、直接口頭や手紙コフレターだけでなく、電話、メール、テレビ電話、インターネット上を介した告白など、多種多様、多岐に渡った告白が考えられます。

そして私もこれから好きな男の子に告白しようとしている女の子の一人。相手は同じ高校で同年代だけどクラスは違う広田祐君。彼とは幼馴染でずっと仲良く過ごしてきた。でも最近彼を一人の男と意識して好きになった、その気持ちを伝えて恋人同士になりたい。けど普通に告白しただけでは本気にしてくれないかもしれない、だから私は他に誰もきつとしないだろう、思い切った方法で告白することにした。

1 (前書き)

楓 雪 17歳

祐くんと幼馴染で同じ高校に通っている高校2年生。

広田 祐 17歳

雪と幼馴染で同じ高校に通っている高校2年生。

朝6時50分、家を出た私は学校までの道を歩いている。今日はいつもととは違う特別な日、少し長い髪は結ばず下ろしていることがほとんどだが、今は顔の両サイドにツインテールに結んでいる。ちょっと恥ずかしいけどこの髪型には理由があって……、
「おっはよう！」

後ろから大きな声で元気な挨拶が聞こえてくる。親友の西村秋季ちゃんだ。振り返って手を上げ、その挨拶に答える。

「おはよう！」

「あっ、その髪型、もしかして……」

「うん、今日しよっかなって」

「やった！ これで4人一緒にデートに行けるね」

「まだ、気が早いよ。これから告白するところなのに」

「大丈夫よ。今日のユキちゃん、すごくかわいいし、きっと広田君オツケーしてくれるよ」

「ありがと。私、頑張るね」

「うん」

そう今日のこの髪型は幼馴染で、ずっと仲良く過ごしてきた祐ちゃんに告白するため。彼女の彼氏が友達で、ツインテールは祐ちゃんが一番好きな髪型だということからだった。

「ねえ、ユキちゃん！」

「なに？」

「どんなふうに告白するつもりなの？」

きつと聞かれると思っていたこの質問。実は私は他の誰もしないような特別な方法で告白するつもりだ。でもそれはちよつと恥ずかしい方法だから、いくら親友相手とはいえ言いたくない。

「それは……、内緒かな……」

「えー、教えてよ」

「だめ。だって恥ずかしいし……」

「そう、ならいいや。その代わり、あとで教えてね」

「いいよ。告白が成功したらね。そういえば、アキちゃんがシヨウクんと付き合いはじめたのって半年前だっけ？」

「そうよ」

「上手くいつてるの？」

「うん。それに……」

「それに……」

「しちゃった、えっち」

「えっ、うそ!？」

私は驚いた、まさか二人がもうそこまで進んでいるとは思わなかったから。ちなみに彼女も彼とは幼馴染、どうやら半年のうちに二組の間にはずいぶん大きな差がついてしまったようだ。

このことは私にとってかなりショックな出来事だった。彼女とは中学生のときからずっと親友で、当然彼氏の人と話したこともある。身長が高くてきりつとした顔つきで、明るく積極的で優しく、ただ彼女が幼馴染という理由だけで付き合ったわけではないとすぐに認識できた。

「どうしたの？ ユキ！ もしかして……、落ち込んでる？」

「うん……」

心配して気遣ってくれる彼女、でも実際に今の私とは大きな差が……、

「大丈夫だよ。ユキもきつとすぐそうなるから」

「そうかな？ ゆうちゃん、そんなタイプじゃない気がするけど」
祐ちゃんはショウウ君とは違って対照的におとなしそうな雰囲気で、普段は静かに一人で過ごしていることが多い。他のクラスメイトにもそっけない感じだけど、幼馴染の私にだけは優しく接してくれていた。

「でも広田君って陸上部でしょ」

「そうだよ」

確かに彼女が言うように意外にも彼は陸上部で、練習は一人で黙々とこなし、うちに大きな闘志を燃やしている印象を受けた。

「なら、すぐにえっちすることになるよ」

「そうなの？」

「うん。だって高校生の男子なんて、表に出してなくても性欲すいんだから」

「ホ、ホント!？」

「うん。だって私も付き合いはじめてから1カ月目でしちゃったもん」

「そうなんだ。すごい」

「あつ、でも1つ大切なことがあるよ。分かる？」

「もしかして……、避妊のこと？」

「そう。たぶんね、広田君もえっちのことで頭がいっぱいいっぱい考えてないだろうから、ちゃんとする前に言ってあげたほうがいいよ」

「分かった。アドバイスありがとう」

ここで二人は学校の正門を通る。まだ朝早いせいか他の生徒もなく、こういう話もしていても恥ずかしさは感じなかった。

「今日、頑張つてね！」

「うん」

「じゃあ、また、あとで」

「じゃあねー」

彼女は私とは別のクラスで後者も違うのでここお別れ、元気よくそのまま走って校舎に入って行った。

まだ朝早過ぎて誰もいない教室、私は一人席に座ってさつき彼女と話したことを思い出していた。その中で一つ気になることがあった。それは陸上部と性欲が、なぜつながるのかだった。もしかすると何かスポーツに関係するのかも、確かシヨウ君はサッカー部で陸上部ではないから。

「おはよう」

「お、おは、えっ、ゆうちゃん」

「やめろよ、その呼び方、恥ずかしいだろ」

「ご、ごめん」

私は驚いてしまった、まさか別のクラスの彼がここにいるとは思わなかったから。

「でも、どうしてここに？」

「ちよつと会いたくなった」

「わ、私に？」

「うん。そうだ、なあ、今日の帰り、久々に一緒にどうだ」

「私と？」

「他に誰がいるんだよ。最近一緒に帰ってなかったし」

「いいけど」

「じゃあ、待ってるよ。部活7時には終わるから、正門出てすぐのところだ」

「分かった」

ちなみに私は水泳部で終わる時間は彼と同じ、夜の7時前だった。でもなんで急に帰りに私を誘ったのだろう、もしかして彼も私と同じ考えなのだろうか。

「じゃあ」

用が済むとさつきと私の机を離れて、自分の教室に戻ろうとする彼。そこで私は呼び止めてさつき疑問に思ったことを聞いてみることに

した。

「あ、待って！」

「ん、何？」

呼び止めると彼は振り返り、私の机の傍に戻ってくる。

「あのさ、どうして陸上やってるの？」

「えっ、それは……、そうだな、楽しいからかな」

「それだけ？」

「それだけって……」

「ほら、広田君って中学のときより部活、頑張ってるから」

「ああ、そういう意味か。なんだろ、スポーツに打ち込んでる時って、いろんなこと忘れられて、ストレスが発散できるんだよね」

「そうなんだ」

「うん。まあ、でもホントは……、あっ、いや、いいや」

「えっ、どうしたの？」

「何でもないよ。そろそろ他の子も来るころだから、じゃあね」

「うん。じゃあね」

そう言っ私は手を上げて、教室に戻っていく彼を見送った。さっき最後に何を言おうとしたのだろう、そこに聞きたかった答えがあったような気がした。

午前中の授業では結局、するつもりで告白と彼に誘われた理由が気になって集中できなかった。そのうち昼休みになって教室で一人、窓から外を眺めつつ弁当を食べる。最近はいつもならあきちゃんと一緒に食べるのだが、今日はぼーとしていて机の上で弁当を空けてしまった。

仕方ないので食べ終わったあと、教室を出て彼女のいるクラスに向かった。

「あきちゃん！」

入り口から手を上げて声をかける。

「ユキー！ こっち、こっち」

すると私の姿に気が付いた彼女が呼んでいる。走って近寄ると隣にはシヨウ君がいた。

「シヨウ君」

「おう！ 久しぶり！ 似合ってるね、その髪型」

「あ、ありがとう」

「きつとオツケーしてくれるよ、ゆづの奴言ってたから、好きな人がいるって」

「ほ、ほんと？」

「ああ、きつと楓さんのことだよ。頑張れよ、告白」

「そ、そのことなんだけど……」

「どうしたの？ ユキ」

私はせつかくなので朝、ゆうちゃんと話したことを二人に聞くことにした。

「あのさ、今日の朝、ゆうちゃんが私のところに来たんだけ」

「えっ、それ、ホント!？」

「う、うん」

「それで、どんな話したの？」

「誘われたの、今日の帰り、一緒に帰ろうって」

「そうだったんだ」

「そうか、ゆうの奴、もしかしてお前に告白しようとしてるのかもな」

流石にシヨウ君はゆうちゃんの友達だけのことはあって察しがいい。まさに私を感じていた予感と同じものだ。

「そっかー、なるほど。これはユキ、先越されちゃうかもね」

「それは……、でも私、自分から好きって告白したい!」

彼女のちよっとしたからかいに反応して思わず口をついた言葉、それは紛れもない私の本心だった。

「あー、ユキ、やっぱりそうなんだ」

「なにムキになってるんだよ」

「はあっ、でも……」

思わず叫んでしまった本心、だけど二人の指摘に急に恥ずかしくな
って顔を赤くする。

「でもそれなら、広田君より先に行動するしかないわね」

「そうだな」

「ねえ、どんな告白するつもりなの？」

「それは……」

「朝も聞いたけどそんなに言いにくい方法なの？」

「うん」

「そっかー、でも言ってくれないとアドバイスのしようがないよ」

「だな」

「……分かった。実はね……、キスで告白しようかなって」

私がゆうちゃんに大好きな気持ちを伝えるために考えた方法、それは何の予告もなく唇にキスをするというかなり思い切ったものだった。

「キス！　すごいな、ユキ。でもちょっと私に似てるかも？」

「えっ、じゃあ、もしかして……」

「何言ってるんだよ、お前はただ、俺の手を握っただけだろ」

「それは……そうだけど」

「どういうこと？」

「実はね、半年前くらいに一緒に帰ったときに告白したんだけど、言う前にシヨウ君の左手を握ってね。でちょっと驚いて立ち止まったときに向かい合って告白したんだ」

「そうなんだ、なんかいいね。どうだった？　シヨウ君は」

「そうだな、……嬉しかったかな」

「ありがとう」

「うん」

「いいなー、私も早くゆうちゃんと恋人同士になりたいな」

「なれるよ、きっと。でも先に告白したいなら早く行動しないとね」

「だな。たぶん、ゆうの奴も狙ってるだろうから」

「そっか、分かった。私、頑張ってみる」

「頑張ってるね、応援してるから」

「頑張れよ」

「うん」

私にとって二人の友人の存在、その応援の言葉は心強くて、告白が“きっと上手くいく”と強く確信することができた。

その日の帰り、午後7時過ぎ、陽はとつくに沈んで辺りはすっかり暗くなっている。部活を終えた私は校舎から漏れる灯りをだけを頼りに、彼が待っている正門に歩いていく。

ところが正門を出てすぐには誰の気配もなく、静まり返っている。

（あれ？ ゆうちゃんはまだ部活？）

そう思ったときだった、突然両肩に手を乗せられた。手の大きさがすぐに男だと分かった、普段なら不審者だと思って叫び声を上げていただろう。だが今日は直感的にその手がゆうちゃんだと分かり、そっと真後ろに振り返った。

「ゆうちゃん、おつかれさま」

「おつかれ、ユキ」

何気ない普通のやり取り、ただ今がちょうど向かい合っていて絶好のタイミングだった。私は高さの足りない分背伸びをして、彼の唇に自分の唇を触れさせた。

唇が触れ合って私はすぐ離すつもりだったし、そうでなくても彼が驚いて突き放すと思っていた。しかし彼は私の腰に手を回し、強く身体を密着させて抱きしめると、唇が離れることを許さなかった。それどころか舌を口の中に差し込まれ、“ちゅぱちゅぱ”といやらしい水音が響きキスはどんどん激しいものになっていく。

キスの主導権は彼が握っていた。実はキス自体は幼馴染だから小さい頃、遊び半分で何度かしたことがあるので初めてではなかった。けれどこんなに激しくて貪り合うようなのはもちろん初めて、彼が告白をきくとオツケーしてくれたって証拠だから、全然嫌ではなく嬉しかったけど、息をするタイミングが分からない。そのうち段々頭がくらくらして、息が苦しくなってくる。

ただそれは彼も同じだったみたいで、ゆっくりと腰に回されていた腕が緩められ、自然に二人の唇は離れていった。

唇を離してから私は、少し苦しくて息を整えるのにちよつと時間がかかった。彼は前かがみになって肩で息をしている私の顔をのぞき込み、気遣つてくれた。

「おい！ 大丈夫か？」

「はーっ、うん、大丈夫。はーっ……ふうっ、ちよつと息苦しいだけだから」

「そうか」

しばらくそうやって呼吸を繰り返し、酸素が補給されてくるとかなり身体と頭が楽になった。そして改めて二人は向き合う。先に口を開いたのは彼のほうだった。

「あのさ、ありがとな。実は僕、ユキのことが……」

「待って！ 私に言わせて！」

「えっ、ああっ、分かったよ」

私は彼が言いかけた答えが分かつて、とっさに声を上げて遮った。行動では伝えることができたけど、まだ言葉にはしていない。けれどせつかくだから直接私の言葉で、自分から先に彼に告白したかった。

「わ、わたし！ ゆうちゃんのが好き！」

「ありがとう。僕も前から好きだったよ、ユキのことが」

「はあつ、よかった」

やっと伝えることができたこの気持ち、幼い時から友達ですつと一緒に接してきたけど、自分の気持ちに気が付けなくて、彼の気持ちに気付けなくて、一線を越えることができなかった。だけど今この瞬間、二人の間は変わった。もう単なる友達ではない、お互いにとって大切な人、恋人同士なれたのだ。

「そうだ、その髪型、よく似合ってるよ。それ僕のためにしてくれただんだろ」

「えっ、まあ」

「実はさ、今日朝会ったとき思ったんだ、告白してくれるのかなって、髪型を見て」

「それじゃあ……」

「うん。ユキからじゃ誘いにくいかなって思って、一緒に帰ろうって」

「そうだったんだ」

「でもまさか、キスで告白されるとは思わなかったよ」

朝会ったとき彼は言うてくれなかったけど、髪型に気が付いてくれていた。そして私の気持ちを察してくれて、“一緒に帰ろう”と誘ってくれた。キスも熱く長くさせてくれた、私はそれらの心遣いが本当に嬉しくて胸がいっぱいになった。

「それくらいしないと気付いてくれないかなって？」

「どういうこと？」

「ほら、私たち、幼馴染でしょ」

「うん」

「だから普通に告白しても、ゆうちゃん、本気にしないで冗談だろって言いそうだったから」

「ここまで言つと彼のことを信用していないみたいだけど、私は正直に思っていたことを告げた。」

「そっか、なるほど」

「キスなら冗談って思わないでしょ？」

「確かにそうだな」

「ここで私は彼に一つ聞いておきたいことがあった。実は今朝彼とちゃんと話したのは1カ月ぶりぐらい、最近話しかけてもそっけなくされた理由が知りたかった。」

「あのね、一つ聞いてもいい？」

「いいけど、何？」

「最近さ、ゆうちゃん、私にそっけなかったよね、どうして？」

「ああ、ごめんな」

彼はそう言つて始めに謝ると、続けて私の質問に答えてくれた。そしてそれは私が朝から疑問に思っていたことの答えにつながっていくようなものだった。

「実はさ、僕、ユキに惚れてたんだ」

「えっ！」

私はちょっと驚いた。嬉しかったけど、その言葉に違和感も覚えた。
「ほら、ユキサ、水泳部だろ。その……水着姿がさ、どうにも頭から離れなくて」

「でも私、中学のときから水泳部だよ」

「バカだな、違うよ」

「どういうこと？」

「ユキが女になってきたんだよ。こんなに成長しやがって」

「……」

彼が私の身体、特に胸の膨らみを見ながらそう言ってきた。嫌ではなかったけど、一瞬どう反応すべきなのか分からなかった。

「本気で好きになった、心も身体も女になってきたユキを。だから悟られたくなってさ、ごめんな」

「……そっか。ありがとう。私、嬉しいよ。ゆうちゃんの素直な気持ち聞いて。それにね……」

すると私は彼の右腕を軽くつかみ、手の平を自分の胸の膨らみに押し当てた。

「おい！ ちょっと！ ユキ」

「いいの、大丈夫だよ、ゆうちゃん」

声を上げて動揺している彼、でも私の胸から手が離れることはない。いやたぶん離したくないのだ、ずっと私の胸に触れてみたくてしようがなかっただろうから。

「えっ」

「だって、私、ずっとこうしてもらいたかったから」

これは私の正直な彼に対する想いだった。不思議なもので女の子である私は、他の人には触ってほしくないけど、彼にはたくさん触れてもらいたくて、私も同じようにしてあげたかった。

「ユキ」

「ねえ、私はずっとゆうちゃんのもの、だから、ゆうちゃんを私のものにしていいよね」

「ああ、もちろん」

辺りは暗いけど学校のすぐ近くの歩道の街灯に照らされて少しだけ明るく、見つめ合っていた目はお互いの顔をしっかりとらえている。そして今日二人はそれぞれにとって特別な存在になった。

「あのさ、もしよかったら、今日このあと私の家に来ない？」

かなり無茶な誘いかもしれないけど、思い切って私は彼を自分の家に誘ってみた。

「えっ、で、でも……」

「無理だよな、いきなりだもんね」

ちなみ私は今家に帰っても誰もいない、けど別に一人暮らししているわけではない。父親は単身赴任で県外に、お姉ちゃんも地方の大学生で一人暮らし、母親は昨日から女友達と二泊三日で旅行に行っていた。しかもその母親の女友達の一人が彼の母親で、彼も今日は一人の可能性が高かった。

「いや、そうじゃなくて……、今誰も家にいないのか？」

「うん。こんなチャンスそんなにかもしれないし」

「確かに。あつ、でも、ユキは分かってるんだよな？」

「大丈夫、私、大丈夫だから」

彼が確認したこと、それは今日、二人で私の家に泊まって、えっちをすることになるということ。

「そうか、分かった。なら帰りに買いに行こうか」

「何を？」

「何って、ーのことだよ」

「考えてくれてたんだ、ゆうちゃん」

「当然だろ!!」

「ありがとう」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

意外だった、まさか彼が私のためにちゃんと避妊のことを考えてくれていたとは。私はそんな彼の優しい心遣いが嬉しくて、胸がいっぱいになった。二人はそのあと一緒に帰る途中に薬局により、避妊具を購入すると私の家に向かって歩いて行った。

END

18 (後書き)

この続き、彼女の家でのえっちのシーンをR - 18指定の小説で書く予定です。もしよろしければそちらのほうもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6215t/>

私の告白

2011年7月10日15時58分発行